
俺の赤と黄色と白の青春（仮）

IZUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の赤と黄色と白の青春（仮）

【Nコード】

N1951Y

【作者名】

I Z U M I

【あらすじ】

日常生活で、定期的に幼なじみで吸血鬼の少女に血を吸われている少年の物語。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 1 (前書き)

友人にと遊びで作った小説です。生暖かく見てください。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 1

吸血鬼なんて伝説ではない世界。種としての吸血鬼、『Homo sanguisibilis』そして、飲血中毒患者が、混在している世界。

……種としての吸血鬼は、『Blood drinker』《ブラッドリンカー》と呼ばれており、ヒトよりも長寿。更にヒトに比べ約0.8倍で成長し、最大150年以上生きると言われている。ネアンデルタール人『Homo neanderthalensis』よりも遅く分岐した種や、彼等とヒトの混血種が変化したとも言われているが、あまりよく分かっていない飲血衝動が現れる珍しい人類だ。彼等は、ヒトよりも筋力に優れ、握力は、成体男性で平均80kg程と筋力もヒトを越えるものを持っている。故に……

高校に入学して一週間も経たないのに、ブラッドリンカーの講義かよ。小学五六年から始まる、ブラッドリンカーとの関わり方の教育。彼等は、20世紀になる前までは、化け物として恐れられていた。彼等は、20世紀半ば、ある生物学者により人間に程近く異なる種であることがしられた。吸血鬼。

その後少なかった生息人数も徐々に増えていった。

そして俺、はなまき けいすけ花巻啓介は幼なじみに、あかつき りいさ暁梨依紗がいる。彼女も高校一年なのだが、見た目が幼い一目見ただけでは、中学生の少女に見える。俺もそうだが、彼女もいわゆる純血家系で、小さい頃から知っているから違いもわかりやすい。

「花巻、確か暁さんブラッドリンカーだよな？ かわいくていい子じゃん。」

高校に入学してから友人になった、秋山賢が、声をかけてきた。授業中だぞ、おい。

「他に、何が言いたい？」

「いや。啓介は、周りの幸運が見えてないのではないっかてね。」

「それだけか。」

俺は、教師が始めた板書に目を移した。

とりあえず、今はブラッドドリンカーの連中は、ヒト『Homo sapiens』の授業でも受けているのだろう。

授業の後の5分休憩。

「ねえ、啓ちゃん。」

ブロンドの髪が俺の後ろから垂れてきた梨依紗だ。

ブラッドドリンカーは、ヒトに比べて、アルビノが、多いらしい。

いわゆるペットではアルビノになる割合が大きいのが良い例だ。だから、金髪碧眼も多い事になるのか？

いつの間にか、透き通るような肌をした腕が俺の首に巻き付く。

「聞いてんのか」。これ以上反応しないんなら、絞めちゃうよ。（

笑）

不敵な笑みを浮かべながら、……絞めた。

「ッー。これ以上力を込めるな。俺もう死んじゃうから。」

「啓ちゃんが、死んじゃうのは、嫌だな。でも……誰かに殺されるなら私が殺してあげる。（笑）」

『でも、』から耳元でボソツと言われたその言葉は、今俺の命が俺の元にはない事を物語った。

「長い付き合いなのに私の事が分からないほうが悪いんだよ。」

腕をとり妙に勝ち誇った笑顔で答えた。

「もうじき授業始まるんじゃないやねえ？」

「大丈夫、席近いし。それでも帰れなんて言うなら血を吸っちゃうよ。」

梨依紗は、綺麗な碧眼と長く鋭い犬歯を見せながら、笑った。

「ジョークに聞こえないからやめろ、幼なじみだからたまに吸わせてるが、痛いんだぞ。しかも吸いすぎた時なんか貧血でくらくらする。」

「私は良いんだけどな。」

たしか梨依紗に俺が、初吸血されたのは、小学生の、四年の頃に図工の時間、小刀で指を軽く切った時に隣に居合わせたあいつが、しみじみ見てぱくつきやがった。

当時は、他にもブラッドドリンカーがいたはずだ。だがなぜかあいつが俺の指を口の中に入れて、吸っていた。

そのあと俺は、幼なじみに血を飲まれた事がショックで倒れた。そのあとの世話を、彼女はいろいろと俺にしてくれたらしい。

この事がきっかけで、これまで以上に家族間の交流が増え、さらに遠足や特に修学旅行先で、腕や首を噛まれ続けた。何でも、彼女曰く、『啓ちゃんの、美味しいんだよね。』だそうだ。

「でも、今ここに私がいるのは、それが目当てではないのだ。」

「じゃあ何だ？ 血以外になんかほしいものでもあるのか？」

「お昼は、私と一緒に食べてね。」

そう、命令して席についた。なるへそ、デザートにでもされそうだ。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 2 (前書き)

設定が設定なので、あまりいいシーンではありませんが……どうぞ。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 2

日本人と思えないような女子が集まった空き教室。俺、花巻啓介は少し離れて、幼なじみ暁梨依紗は友人達と仲良く昼飯を食っていた。あまり日の入らないように設計された北棟にある教室。取り合えず、現状把握を。

——明るい所を嫌う……いや、紫外線を嫌っているブラッドドリンカーは、この北棟の教室に集まる事が多い。

だからか、よくフードまで付いたブラッドドリンカー用特殊制服を頻繁に見かけ出す。とりあえず言っておくが、伝説の吸血鬼のように死ぬわけではない。赤く日焼けする程度。ヒトとは違うものである程度紫外線をガードしているらしいが……。

無論、梨依紗もフードがある制服だったりする。夏は、暑くないのかな？

ヒトは、『ここ、学校の中で暗い所だから嫌だ。』何て言って寄り付かない事が多い。

確かに暗いから怖いっつーか窓らしきものが無いんだよ、ほぼ壁だし。下には10cm程度の縦幅しかない窓があって、基本は換気システム（全教室にある大規模な換気扇）を常時着けているらしい。

彼女は比較的温厚な奴らのところを選んでくれたとのことだ。梨依紗曰く。

俺が今の教室に入る前に梨依紗に、「中は、私の友達の子しか居ないけど。ヒトなのは啓ちゃんだけなんだから、絶対血を出さないでね。そんな事したら、みんな啓ちゃんを襲うかもね。」なんて笑われた。

男の俺が、梨依紗を始めとする女子高生に襲われるのはかなりシュールだし、死にたくない。

そんな訳で、何も内見てないがーっ命名。吸血鬼ハーレム、否『吸血鬼の料理店』^{バンパイアレストラン}。他のヒトの男子も騙して連れて来るべきだった。教室に入ってから、梨依紗はまず俺を彼女達に紹介した。空気が若干鋭くなるのを感じた俺は、怖くなって少し離れた所で座って飯を食う事にした。――

よし現在、梨依紗が、楽しそうに友人と飯を食べている。何とまあ微笑ましい光景じゃないか、彼女達が吸血鬼でなければ。

「ねえ、何で花巻君は、そんな所にいるのお？」

突然の声かけに驚いたが、とにかく顔を上げた。特殊制服を身に纏った他の少女達より大人な顔で白雪のような肌にうっすら血の紅が透けて見える。紅い瞳、白銀の髪に黒のハーフリムメガネをかけた女子生徒が、目の前に立っている。

「ああ、少し……な。微笑ましい光景だんと思って。」

彼女は、少し驚いたような顔をして次の瞬間噴いた。

「笑うなよ、良いじゃ無いか。幼なじみが、楽しそうに友達と会話してるのを眺めたって。」

「ああ、嫌なふうに感じたならゴメン。そうじゃなくて、ここにヒトの男子生徒は、珍しいなあってねえ。後お、その言い方が保護者みたいだなあって。」

そこでの彼女の笑顔は、薄暗い教室のはずなのに彼女だけが、まばゆいの光りを放っているように見えた。すごい美人だ。でも保護者は、無いだろ。まだ高校入ったばかりだぜ。

「そういえばあ、あなたの名前は聞いたけどお私の名前を言ってなかったねえ。私はあ、橘向日葵^{たちばなひまわり}だよ。こんなだけどヒトとブラッドドリンカーのクオータなんだあ。よろしくねえ。」

「クオータか、じゃあ血を吸ったりは？」

「私はあ、ヒトの血が多いからねえ。飲まないよお。」
「そうなんだ。」

ゆったりとした口調のおかげで、楽しい時間が出来た。

「向日葵ちゃん。さっきあったばかりで何でそんなに啓ちゃんと仲が良いのかな？」

梨依紗が、笑顔で現れた。黒いものが背後に見えるのは、気のせいだろう。

「啓ちゃん。こういう娘好きなんだ？私がいるのに。死にたいの？」
いつにもましてすごい笑顔だ。キラキラしたものが見える、黒いけど。

「わかった、わかったから殺すな。」

「分かってないくせに。……でもいいや、私が手をかければ、啓ちゃんが私の中で永遠になるよ。」

やばい、マジで鮮血ものになる雰囲気だ。

「やめろ、いつも近くにいます。」

「しょうがないなあ、まあいいや。そんな啓ちゃんにいいお知らせです。私が、殺さない程度のストレスで髪を白くしてあげるから、銀髪さんを追い掛け無くても良いのです。」

女神のような笑顔で死神が囁いた瞬間だった。

「あー、でも啓ちゃんが白くなっても意味がないのか。どうしようかな？」

多分、彼女は、自分が出る最大限にかわいい仕草をしているつもりだろう。端から見ればかわいいのだろうが、吐いている言葉がグロイ。

そんなこんなをしていると、鉄サビに似た匂いが、鼻をくすぐる。

「なあ、梨依紗さん。」

「何かな？啓介君、そんなに改まって。」

「俺の病氣を知っての飲血かな？」

「啓ちゃんの病氣って何だっけ。」

梨依紗が、笑いながら目を反らした。俺に飲血を誘っているらしい。
「飲血中毒なの忘れたのかよ。」

飲血中毒は、俺が持っている病氣だ。精神病らしい。俺は、中学生

くらいに発症した。今では、他人も自分も傷を付けないが、その代わりに暁家にて輸血パックの血を、月に二・三度一緒に頂いている。とりあえずほとんどこれが理由で、最近では梨依紗に血を飲ましている。

とにかく飲血を、この国は嫌な様には見ないが、俺は、どうにか治したい。

「なんだ。花巻君、飲血中毒なんだ。なら飲もうよ。」

「大丈夫、輸血の消費期限が切れた物だから。」

「あそこまで避けてるのに、私たちと同族なんだ。何で避けるの？」
そこの真のバンパイアのお嬢様方は、かわいい顔して恐ろしいことを吐いていらっしやる。

それに輸血パックから血をティーカップに注ぎ彼女達は飲もうとしている。

「橘さんは、飲まないんだっけ？」

俺が、苦し紛れに発言する。

「ゴメエン。血を飲むことにい、私い抵抗があるんだあ。」

「だよね。それが、普通の対応だよ。ごめんね。」

「啓ちゃんがこれ飲んでよー、私は啓ちゃんのラッパ飲みするからー。」

紅黒い液体の入ったカップを金髪の少女から渡される。酷いシーンだな。

「そういえばこっちのほうが好きだったよね。」

まるでコーヒーにミルクかシロップを入れるようにカップに液体が注がれる。今まで紅黒かった液体は、みるみるうちに鮮やかな紅と化した。注いだ液体には、酸素かオゾンのナノバブルが混ざっていたのだろう。もっとほかのものかもしれないが……………。

「ほら綺麗になった。だから早く飲んでよ、ラッパ飲みたいよ。」
駄々っ子か！！あと、俺はペットボトルじゃねえ、…………でもこの匂いは、もう我慢も無理かも。

「飲む。飲みますよ。梨依紗、この次体育だからそこら辺配慮しろ

よ。」

「やったー。ラッパ飲みだー。」

俺が先にティーカップから飲み、梨依紗が、俺が、カップを置く事を待ち望んだように首筋を噛んだ。

見た目は中一でも、体はやはり高校生なのか、後ろから抱き着くように吸血行為をしているため、胸が当たる。

金髪、碧眼の女子高生に後ろから抱き着かれるなど、一般高校生には甘すぎる瞬間だが、吸血の痛みが襲った。

いつもなら、痛いだけだが、全身に別物の感覚が走る。

何と言うべきか、全身が疼く感覚かな？

結局俺は、異様な感覚のまま吸われた後、スポーツドリンクを飲んで、体育へ。そして授業中に貧血で倒れた。

当たり前だよな。スポーツドリンクは、すぐに血にはならない。血を飲んだとしてもそんなに早く効果はでないしな。

俺の幼なじみⅡ吸血鬼 Part 3

体育の授業中に倒れた俺は、すぐに保健室行きになった。

そして、放課後までにやっと起きれるような状態になった。それよりもよく学校に点滴あるな、学校医が居た時でよかった。梨依紗に学校の荷物を持たせて。俺がああなるまで吸った酬いを受けてもらった。重労働かは疑問だが……。

自宅についたら母親が、梨依紗を快く迎えた。

「あらリーちゃん、こんにちは。なに？この子また貧血起こしたの？ごめんね毎回。」

「いえ、楽しくお世話をさせていただいてます。」

何で、親の前だとこんなにいい顔出来るんだ？原因はおまえだろ。

「啓介、今度からレバーとかほうれん草とか、食事は鉄分多いのにしないとね。」

母上。そんなことを言うより、彼女曰くの『ラッパ飲み』をやめさせた方が得策かと。

「だったら、あなたの吸血中毒をお金をかけずに治しなさい。あなたが飲む血は、暁さんが、出してるのよ。」

はい、正論です。すみません。治りにくいんですこれ。

「なら、大人しく飲まれなさい。血を飲んでるんだから、飲まれなさい。」

なに？その等価交換。自覚あったけど、母親に言われると、『だったら治しませんか？』って突っ込みたいよ。

「わたし、そろそろ帰りますね。おばさん、さようなら。啓ちゃんも。」

「おっおう。さようなら。」

「また来てね。梨依紗ちゃん。お菓子とか置いておくからね。ああ、でも啓介の血があるか。」

俺の周りにはこんな事を笑いながら言う女の人しか居ないのか？

自宅和室、若干貧血気味でくらくらする体を畳の上で倒して楽にしている、嵐が来る。

プミ、ツグハ。

「なんだそんな所に居たんだ。今日は、学校でリーちゃんに吸われたの？」

我が妹様の登場だ。

俺の事は、踏んで確認。毎回とは言え、それが兄貴に対する対応だよ。

「何でこんなナマケモノみたいなのを兄貴にしなきゃいけないの？どうせリーちゃんのおやつみたいなものじゃん。」
自分の兄貴をおやつ呼ばわりするな。

「いいもん、リーちゃんに戦いかた教えてもらうもん。でもすごいよね、この獣の血でリーちゃんったら手取り足取り教えてくれるんだよ。もっとイケメンから貰えば良いのに。」

確かに、彼女はそこが変な所でもあった。

俺以外にもヒトは、いるし同族同士での飲血も頻繁と聞くし、なにせ消費期限ギリギリの輸血パックつという裏技すらあるはずなのに俺から吸いたがる。なぜだ？

結局、妹から追われて自分の部屋に入った。俺って兄の威厳無いな。ベッドから見える本棚にしまっている厚い本の数々。俺が小学生くらいの時、幼なじみの事を心配して調べ尽くした、ブラッドドリンカーの資料だ。

ブラッドドリンカーにも色から優劣をつける時代があったらしい。ランクは、リフキ＞パイロインス＞フォロマティストの順だ。

まずは、『リフキ』ギリシャ語で白を意味する。いわゆる、色素が薄い外見のブラッドドリンカーを呼ぶそうだ。最上階級に位置する。比較的古くから待遇がよかったらしい。この体色が一人生まれれば、一族が安泰になると言われた。彼等にはメラニンに変わる紫外線を防ぐ物質を保持している、故に色素が薄くてもある程度は平気なそうだ。

その下は、『パイロインス』ギリシャ語で似ているを意味する。リフキのようであるが、ごく少量色素を持っている者を指す。でもやはり違いはわかるようだ。

それ以外で、メラニン所有者は、最下級『フォロマティスタ』ギリシャ語で有色を意味する。これにいちするのが梨依紗だ。（暁父、談。）、取り合えずブラッドドリンカー内でも、一番多いらしい。更にぱつと見、白人に似ている。

飲血衝動については個人差は見られるが、基本食欲や、喉が渴いたりするのと同じらしい。

まあ、こうなってしまった自分が、よく分かってるんだが。

後は『ドラキュラ』、西洋の吸血鬼伝説の本を片っ端から集めた記憶がある。とにかく必死だったのだ。幼いながらも幼馴染に対して知らないことが多すぎたと思ったのだろう。

「早くお風呂、入りなさい。」

「はあーい。」

その事を埋め合わせそうとする自分もいた。人は、年齢云々をすっ飛ばして悩む。特に身近なものの変化や身近に感じていたのに何も知らないことには。

はあ、ため息を付きたくなる状況が目の前に広がっている。

「はああ、おはよう。啓ちゃん。」

「おはよう、不法侵入者。なぜそこで我が家のように座ってるんだ？」

食卓には、妹と梨依紗が座っていた。

白い少女Ⅱクラスメート Part 1

「さてと。お前に聞きたい事があるのだが。」

「なあに？」

梨依紗は笑顔で返す。本当に小学生みたいな笑顔だ。

「お前は何でここで朝飯を食べている？お前の家はこの家から5mほど離れた所にあるだろう？」

「今日から二人とも海外だから今日から一週間泊まるの。」

紫陽花のような紫色をしたスーツケースを取り出した。なんだかでない。

「お袋もお袋だ。そんなことになるのがわかったら連絡してくれよ。」

「言ったわよ、あんた寝てたけど、『うん、わかった。おやすみ。』って言ってたし、ああわかったのになって。」

この親、寝ぼけたこと言ってますよ。

「わーい！！リーちゃんがうちにいるんだ！」

「おい、椿。お前は中三だろ。まだ遊べるのかよ？」

「啓介より頭いいんだから、行けるに決まってるじゃん。」

左様か。

結局この子はそのまま家にいることになった。梨依紗、貴様は何様だ！？

学校に行く例によって秋山がたかって来る。

「何だよ、そのリア充は。俺にも分けてくれ。」

「そんなものはない。秋山に何が見えるか知らないが、俺はそんな変なものを持ち合わせてはいない。」

「この天然物め！」

変に盛り上がる秋山を軽く無視をしつつ席に着く。

この時に気がついたのだが、廊下側の日の当たりにくい席に見覚えのある黒い眼鏡にフードから白髪が出ている女子生徒が席に座って本を読んでいる。後で声をかけておこう、今はもう一人めんどくさそうなやつが来そうだ。

「啓ちゃん!! 何で何も言わずに先に行っちゃうの?」

「家で静かに出来ないなら学校に行った方がマシだからな。先に行っただよ。」

「啓ちゃんがくれた。お母さんそんな子に育てた覚えありませんよ。」

梨依紗が何やらパニックになってやがる。

「梨依紗は俺の母親じゃなくて幼なじみだろ。変なことを言うな。」

「あれ? もう私を異性としてみてくれるようになった? 啓ちゃん、うれしいよ!!」

俺の後ろで何やら嬉しそうにキャピキャピしている一見すると小学生なこいつを見ると、『ああ、こいつもまだガキだ。』っと思ってしまう今日この頃だったりする。「嬉しいことはわかったが、早く席につこうな。もうじきSHRの時間だ。」

後、二・三分というところだろう。

「え?」

「だから席につこうな。良い子ならしっかり付けるよね。」

押し出して小学生を席につける。こいつら力があるから大変なんだよな。なんて、いつもの一日が始まる。

昼休み、また梨依紗に引きずられて流された北棟の教室。

また集団から少し離れたところで飯を食いはじめる。

ところでだが、梨依紗と他のブラッドリンカーを見比べると明らかに梨依紗が小さく幼くも見える。やっぱりあれかな? 俺達ヒトもあいつらブラッドリンカーも成長速度は変わらないわけか。それにしても――

「こんにちはあ。またあここにいるんだねえ。」

「おわつと。」

いきなり声をかけられてさらには目の前に急に出てきたから何を示したのか全くよくわからない言葉が出てきた。そして相手は橘さんだった。

真横の席に座りながら話は続いた。

「びっくりしちやったあ？ごめんねえ。また会ったからあ声掛けちやったあ。」

いつもなのか、どうしてもものんびりしているようにしか聞こえないのは俺だけなのか？

「そうだね。梨依紗にまた引きずられたから、のんびり弁当を食べたんだけどね。」

「そうかなあ？何かあ、ずーうっとお梨依紗ちゃん達を見てた気がするよお。」

何だこの緩いなかにある鋭い観察眼は……。まあ、今そんなことを考えても何もならないわけで。

「そんなこと無いつもりだけどな。そういえば同じクラスだったんだね、気がつかなかったよ。」

「へえー、そうなんだあ。声掛けてくれればよかったのにい。」

何だ、気がついてなかったんだ。そりゃそうだ。あんなに真剣に本を読んでたんだからな。

「ねえねえ、梨依紗ちゃんとよくいるみたいだけれど何で？」

「ええ？」

考えたことが無い。何でだろう。

幼なじみだから？これだと高校や中学になってから幼なじみと疎遠になったと言っているやつらに訊いてみると『それはおかしいだろ』と言われてしまいそうだ。

かと言って笑いながら『何となく』何て言ったらどうだろう。これもこれで変ではないだろうか。

そんな思考を繰り返してるうちに、一つ中途半端な答えが出てきた。しかしどれだけ中途半端でもこう言うしかない。

「成り行きだよ。小さい頃から家族みたいな付き合い方をすると成り行きでこんなになるんだ。」

「へーえ、そうなんだあ。なんだか大変だねえ。」

普通に笑いながら意味深な感じに言葉を述べる橘さんが、異様に怖かった。

白い少女Ⅱクラスメート Part 2

放課後。今日は家に帰るのが憂鬱だ。梨依紗には、少し用事があるからって先に帰ってもらった。さて、少し図書室で時間を潰すか。うちの学校の図書室は蔵書が多いらしい。だからなのか北棟と南棟に一つずつ図書室がある。南棟が第一図書室、北棟が第二図書室だ。第一は置いてある本が多く、図書室自体が広い。

変わって第二。一般の教室をそのまま二つなげたような感じだ。今、用があるのは第二図書室。理由はのちほど。

第二図書室に着いた。内装はなんだか凝っていて、照明のほとんどが間接照明で、机に本を読むためのちよつとした照明が付いている。それを点けなければ細かい文字なんかは読めない。学校の図書室としてどうかと思う。まあ、いえはここに重要な書物を置いておけば、日焼けすることも無いだろうしな……。いや、普通に読むものあるはずだよ。まあしかし、ここで調べ物をするような大層なやつをここに来てから見たことが無い。まだここにきて二回だけけど。

ここの存在自体第一図書室にいる司書さんに聞いたら奨められたからで、……んあ？調べ物の内容か？

訊かないでくれ、ちよつとした現実逃避の材料集めだ。

ほとんど人はいないのだが、生徒が図書委員の仕事で、開いている時にはだいたい一人はいるはずなのだが、今見るかぎりカウンターには人はいなかった。適当な席を探して少し時間を潰すか。

それにしてもこの雰囲気は眠気を誘うよな。

目についた席に座ると眠くなり始める。

ああ、やばい。眠い。少しならいいよな少しだけなら。

俺の意識は徐々に闇に落ちていった。

「…………すけくん。ねえ…………なまき…………おきて…………」

誰かに呼ばれてる気がする。でも言葉がはつきりしない。なんだろう？それより誰？

「花巻啓介くんっ、起きてえ！もおここ閉めるんだけどお！！」

「ふえっ！？」

なんだかはつきりしない意識の中いきなり大きな声が聞こえた。

「はあ、やっつと起きてくれたあ？ここはあ、仮眠室じゃ無いよお。」

目の前には橘さんがいた。薄暗いのによく見えるわあ。

「ああ、ゴメン。つい寝ちゃって。」

橘さんは、俺の使っていた机を見て、ため息をついた。

「なあんにも、本をお読む気なかったでしょお。人を起こすのっ、大変なんだよお。」

「あっ、はい。以後気をつけます。」

なんか橘さんに怒られた。しゃーないか、確かに寝るところじゃ無いもんな。

「ところで橘さん？橘さんは図書委員だったんですか？」

「そうだよお。今日はあ、第二の放課後が当番なんだあ。」

そーなんだ。あれ？でもカウンターに誰もいなかったような。

「でも、カウンター空いてたよね？」

「ここにもお、司書室はあるんだよお。だいたいこの担当になった生徒はあ、そこにいるんだよお。」

そういうことか、相当人が来ないんだな。

「それよりも今何時か知ってる？」

「えっ、ちよつと待ってえ。」

白い腕から赤い時計を出して時間を確認している。

「えーつとお、6時30分位かなあ？」

は、はあ。6時半位……………6時半？だいたいそんな時間までな

んで寝てたんだよ。単純に二・三時間は軽く寝てたことになるわけか？

「早くでてよお。私い、ここのかぎい閉めないといけないんだからあ。」

「っあ、はい、すみません。」

そしてそのあと途中まで橘さんと一緒に帰ってしまった。綺麗やなあ、白銀の美少女。

家に帰ればそれはそれで、

「お帰り、啓ちゃん。遅すぎ!!」

梨依紗はまるで鬼のように玄関で待っていた。

「ゴメン、図書室に用があつてそっちに行つてた。」
くんくん。

梨依紗が、まるで警察犬のように俺を嗅いでくる。

「他の女と一緒にいたでしょ。」

「い、いや。いないよ。」

嘘をついた。しょうもない嘘を。いや、梨依紗が怖かったからなかそういわないと、死んでしまうと思つて。

「女物の香水のにおいがついてるんだから!!」

女は他の女のおに敏感と聞くが、怖すぎるだろ。

「やっぱり、私がついてないと、啓ちゃん浮気しそう。なんにも言わないで他の女の子といるなんて、お仕置きだよ。」

そして俺は腕が噛まれたことなんかは知れたこと。

やっぱり鬼だ吸血鬼という名の。

「二人とも、じゃれてないで。ほら啓介、ご飯食べてないでしょ。早く食べなさい。」

母上はいつもどうりだ。この血みどろの現場のなにがじゃれているのか？慣れちゃいけないと思うのですよ、この状況に。

っーかおい。お前、おいしそうな顔して俺の血を飲んでるな、その吸血鬼。やばいなんか頭がくらくらしてきた。

白い少女Ⅱクラスメート Part 3

いつものように切り傷のような傷が沢山出来ている腕からは血が出ていく。

「また梨依紗ちゃんと喧嘩したのか？いつにも増してひどいね。」
近所の診療所の先生に笑顔で言われながら鬼に噛まれた跡を縫われていく。

「今日はすみません。こんなギリギリな時間で。」

診療時間ぎりぎりに半分死にかけの状態で担ぎ込まれてきたのだから、迷惑この上ない。

「大丈夫だよ。診療時間内だし、本当に危なかったし。」

俺の噛まれていない左手には輸血で血が入れられていく。

「本当にあの駄鬼にはしっかり言っときます。」

「そんなことを言っちゃダメだよ。いつも仲がいいんだから。」

「え？あ、はい。」

「二人とも仲良くね。輸血が終わって落ち着いたら帰ってもいいからね。」

そういうと先生は裏に去っていった。

現在、診療所のベッドの上。

泣きたくなるね、こうと痛い思いをよくすると。

毎回血を吸われるのは慣れてるが、こうと怪我をして輸血をされている状態なんか、ほんとにこんなのいいのかと思う。

でも、そんなことばかり言っても何も始まらないからな。

「でも、……ったく。何に怒ってるか知らないけど、こんな事しやがって。」

ベッドの上で思い出し笑いをしてしまった。アホくさい。
そう考えながら夜が更けていった。

休日を挟んで三日後、月曜日。学校、登校時間。

まだ傷の痛みが引けないが、金曜日よりもマシになったのが幾分かの救いだ。

それでももう一つの救いは左腕だけもまともに動くということだ。たまに思う、幼馴染が体をボロボロにしてくることを勘弁してほしいと。

「おはよう。」

「おはよう。」

「いつ見てもおすごいねえ。」

「まあ、いつも忘れた頃には治ってるし、いつもの事だから。」

橘さんとあって始めにまた腕の事を言われた。そりゃ、目がいくだろうよ。血が所々ついた包帯腕に巻いてりゃあ。

「金曜日い、すごかったねえ。梨依紗ちゃん、ずーっとついて。今日はあ、誰もついてなくてえ、平気なお？」

「誰かがいても五月蠅いだけだ。それにこれ以上あれに心配されるような傷じゃないと思うぜ。」

「そおなんだ。」

実際痛い事には変わりが無いのだが。

女の子に心配を書けるわけには行けないからな。

「よっこいしょ、つつつ。」

かばんを置くとやっぱり痛みが腕を走る。

「よっ。朝から女子と仲良く会話かよ。」

「おはよう。橘さんとは、友達だ。」

秋山が、朝から怪訝そうな顔して話し掛けてきた。

「そうかよ。それも仲がいい幼馴染にやられたんだろ。いいなあ。」
包帯を巻かれた腕を見ながら言われた。

「よくない。三日経ったが地味にまだ痛いんだ。少しくらいその事

を考えてくれないか。そうだ、何か少しくらい手伝ってくれ。暇だろ。」

「ハイハイ。」と言いながら少し仕度を手伝ってくれる。なんだかんだ言っているが、ありがたい友人だ。

そのあと朝のSHRまで本を読んでいた。

「今日は北棟じゃないのかよ？ 昼飯。」

「悪いか？ 動きたくないんだ。あくまでヒトなんだブラッドリンカーじゃない、少しくらい行かなくてもいいだろ？」

昼休み。教室で飯を食っていたら、秋山に

この四日くらいで北棟にいく変人として俺は学校中で有名になってしまったそうだ。

めんどくさいものだ。

飯を食べるときに噛まれなかった右腕にいくつか犬に噛まれた跡のような痣がいくつか出来ている。すべて喧嘩の跡だ。

まるで猛犬だよ……、間違えた猛鬼だよ、梨依紗は。喧嘩をすればよく噛むし、片腕を噛めば離してくれないし、ついでに血は飲むし、たまに傷が治りにくくなるしで、あいつとの喧嘩はいやだ。

「毎日、包帯を変えてもらってるんだろ。梨依紗ちゃんが。いいよな。」

「いいもなにもない。怪我をさせたのも、あいつなんだ。」

「恵まれてるじゃないか。あんなかわいい子に世話をしてもらえて。」

「何を言ってるんだ。怪我をさせたのはあいつだぞ。最低限はしてもらわないとな。」

不服そうに俺を見ながら秋山は何かを言いたそうだ。

「何を言いたい？」

「お前は幸せだよ、それが見えてないなんてかわいそうだな。」

「ああ、そうか。」

「啓介。お前にとって暁さんはなんだよ？」

「なにいきなり………」

いきなりすぎる友人の問いに驚いた。

「いいから言え。」

「……妹だ。」

はずかしすぎる答えだ。自分でももう言いたくない。

「はああ？なんっていった？」

「妹だよ。見た目的にそうだろう？中学生くらいに見えるしな。」

「正気か？お前確か妹いたよな？」

「ああ、いるが。あれは俺を兄貴だと思ってねえみたいだがな。」

「だからって暁さんを妹に見立てるなんて、変だろ。」

あからさまに変人を見るような目で俺を見ている。

「違うよ、違う。ほら、家族単位で関わりがあるんだぜ、あんな性格だったら普通そう思うって。」

「お前には何も言う事はないよ。」

そう言って弁当を持って秋山が去っていった。

何が言いたいんだ。あいつ。

俺も弁当片付けないとな。まだ授業か、しんどいな。

俺も弁当片付けないとな。まだ授業か、しんどいな。

「ねえ、今日は一緒に帰ろ。いいでしょ、今日で啓ちゃんの家にいるの最後なんだから。」

「ああ、そういえばね。いいよ。」

「ありがとー。」

何だか楽しみに抱き着いて来た。

しかし残念ながら俺は今、自分の判断を間違えたと思った。

怪我の部分に彼女の腕が当たっちゃったからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1951y/>

俺の赤と黄色と白の青春（仮）

2011年12月31日10時45分発行